
単品集うそ風味

runaway

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

単品集うそ風味

【Zコード】

N6322W

【作者名】

runaway

【あらすじ】

焼き鳥、ピザ、生春巻、チゲ鍋、モツ煮込み、刺身、チャンプルー、おでんetc。食べきり単品の軽いおつまみをご用意しました。じゃなくて、読み切り単品の軽い短編集デス。へんな味がするかもしれません。全体に短めの小ネタ話です。最新話『無礼講』…『旨い酒と飲み仲間！』／『魔術師の饗宴』…魔法使い一家の悩み／『街角の神』…酔払い都市伝説

01・異世界トリッパー

毎月購読している『まじかる まじっく』の最新号を手に入れた。

今月の特集は「日常脱出！ 異世界トリップテントプレート集までついている。付録としてなんと異世界トリップテントプレート集までついている。ひとつひとつのシチュエーションと封印術式がセットになつており、状況を再現して封じ込められた術を解放すれば、異世界に遊びに行けるというわけだ。

面白いのでさっそく試してみた。

VRMMORPGからログアウトできなくなつたら異世界だつた。
雨上がりに空が映つた水溜りに踏み込むと異世界だつた。
地面に開いていたマンホールに落ちると異世界だつた。
突然夢の中で神様が話しかけてきたら異世界だつた。
歩いていてトラックに撥ねられると異世界だつた。
風呂でいい気分で居眠りしてたら異世界だつた。
国境の長いトンネルを抜けると異世界だつた。
マンションのドアを開けたら異世界だつた。
勇者様として召喚されると異世界だつた。
山で迷つて人里に出たら異世界だつた。
流れ星にぶつかつたら異世界だつた。
通り魔に刺されたら異世界だつた。
死んで転生先が異世界だつた。
夜寝て朝起きると異世界だつた。
死んで転生先が異世界だつた。
引っ越し先が異世界だつた。
お隣さんが異世界だつた。
商店街が異世界だつた。

学校が異世界だった。

家が異世界だった。

遠い世界だった。

異世界だった。

あれこれ試して辿りついた異世界で遊んでは、冊子の後半に封じられている帰還テンプレートの術式で帰還する。
そしてさんざん異世界ライフを満喫して、いつもと同じように帰
るとして。

帰還の術がどれも使用済みになつていて、ことに気が付いた。

異世界トリップは、行きのパターンは多いが、帰つてくるパターンは意外に少ないのだ……。

ところがで、やむなく私はこの異世界で生きていくことになつた。

しかし、もうひとつ異世界トリップテンプレート集に「異世界に行きまくつて帰れなくなつた」なる新たなテンプレが加わつた。

……かどうか、私に知るすべはない。

01・異世界トリッパー（後書き）

トリッパー（Trippa）は、ハチノスを中心とする胃や腸の煮物。イタリア北部などで広く作られている。ハーブを少し入れた湯で、臭みを取り除きながら柔らかくなるまでことこと煮、塩味の他、トマト、ニンニク、ワイン、チーズなどで味を付けることが多い。

< Wikipedia「ハチノス」より引用>

とは関係ありません。

02・悪魔の誘い

もううらがひにもいひにもならなくなつて、ついにうつかり悪魔に頼つてしまつた。

「悪魔でもなんでもいい！ 助けてくれ
「喚んだか？」

やけくそで喚いたわめら、本当に悪魔が現れたのだ。
悪魔はにたりと嗤つて言つた。

「さあ、では契約だ。その願いを叶えるために、代償としてお前は何を差し出す？」

「くそつ、命以外ならなんでもいい！」

「承知した。では命の次に大事なものをいただこうか……」

浮かび上がつた魔方陣に指を噛んで血をたらし、契約が交わされた。

悪魔はまがまがしい翼を広げ、凶悪な鉤爪を宙にかざし、雑音め

いた呪文を唱えて、あつとく聞に願いを叶えてくれた。

無事契約が果たされると悪魔は言つた。

「では代償をいただくぞ」

何を持つていかれるのがびくびくしていると

悪魔は私がかけていた眼鏡を奪い取つた！

うわあ、そいつは困る。何も見えない。

自分は極度の近眼なので、眼鏡がないと生活できないのだ。

ぼやける視界にパニックに陥った私をなんざんからかって楽しんだ後、哄笑を響かせながら悪魔は去つていった。

とるものもとつあえず近場の眼鏡店に駆け込み、新しい眼鏡を購入した。

眼鏡ができるまでの数日間は本当に不自由した。

いやあ、ひどいめに遭つた。

それにしても、命の次に大事なものが、金で買えるもので助かつた……。

03・周回遅れのホールティ（前書き）

今日は4月11日です。

4月11日。しがつじゅういちにち。the 11th of April.

オーケー？ レディ、ゴー！

03・周回遅れのフールディ

忙しく過ぎてこるうちに、4月1日を逃してしまった。

あれほど楽しみにしていたエイプリルフール。悔しいなあ。
そういふしたら、友人が教えてくれた。

「じゃあチャレンジする？ 周回遅れエイプリルフール」

「なんだそれ」

話によると、うそをつき損ねた人のために、4月11日にも十日遅れのエイプリルフールという設定日があるそうだ。

ただし、神のお情けによるワンチャンスなため、中途半端なうそは赦されない。

しかも10回に1回は神様の加護が効かなくて、うそが本当になつてしまふらしい。壮大なうそをついた挙句にとんでもないことになりかねない。

さらには、もともとあまり有名でもないイベントのため、周囲に失笑されて恥をかくリスクも高い。

十日遅れるぶん、成功率も10%がいいところとこりしり。

聞けば聞くほど、ハイリスクローリターンだ。

さすがにそこまでしてうそをつく気にはなれないなあ。

そう言つと、友人はうなづき にやりと笑つた。

「うん。 だる。

……つてのはどうだ?』

あつ、くそ。
やられた!

「つかよ

「周回遅れで年中行事なんてあるわけないじゃん……』

そのとき、突然耳鳴りがして頭の中に声が響いた。

『なかなかいいうそだつたぞ。相手を完全にだましたしな

一人で驚いて周囲を見回したが、俺たち以外の姿はない。
声は続けた。

『では11日ゆえ、判定だな　　おつと、外れだ。この「つかよは保護
されない』

「えつ……』

『じゃあ、4月11日は周回遅れエイプリルフールつてことで、今
から確定な。

やれやれ仕事が増えちゃったなあ』

妙に楽しげな様子のつぶやきを最後に声は途絶えた。同時に耳鳴
りも治まる。

俺と友人は顔を見合せた。

「これもつかよは……?』

「さあ……。でも今の“外れ”とか、絶対わざとだよな……』

「神様も「つそ好きなのかな……」

「つそのかうそから出たまことなのか、よく分からなが。

次から4月11日の「つそ」は、気をつけたほうがいいかもしだい。

冷蔵庫の中にプレインヨーグルトがあったので、食べる」といってた。

封を切つて皿に取り分け、スプーンに付いたヨーグルトを舐め取る。

そして付属の砂糖の袋を破いて、上にかけようとした、そのときも。

『あなやー。』

腹の中から声が聞こえた。

『同志よ、心せよー。彼の地は悪玉菌の巣窟やくくつぞー。』

目のヨーグルトがぞわぞわと色めきたつ。

『そはいかに!? しかと承つた! 我ら今より一致団結して討ち入らん!』

「あ、あの?」

呟くと、ヨーグルトは言つた。

『安心召されい! みどもの手にかかるば、悪しきウエルシュ菌なぞ死したも同然! わせり、召し上がるよー。』

「じゃあ……」

『あいや待たれい!』

ところが改めて砂糖をかけようとするとき、怒られた。

『糖分はならぬ！ 敵に塩を送るようなものじゃ！ リリザベベツ
ヒ堪えて、きな粉にてみどもを加勢されたし…』

そう言えば、何かの健康番組で、ヨーグルトにはきな粉をかけて
食べるといいとか言っていたような気がする。乳酸菌が活性化する
とかなんとか。

仕方なくきな粉をかけて、ぐりぐりとかき回した。
不味そうだなあ……。

『早づ、早づ増援を！ ぐおおおー！』

腹の中では、先に攻め込んだヨーグルトが断末魔の悲鳴をあげて
いる。

『準備は整えり！』

高らかな宣言と共に、ヨーグルトが鬨じきの声をあげる。

『もはや一刻の猶予もならじ！ いざ討ち入りのとき！』

『ウェルシユ菌の牙城を陥落せよ！』

『乳酸菌、万歳！』

『万歳！』

……これ、食つの……？

久々に空飛ぶじゅうたんを引つ張り出してみたら、虫食いだらけになっていた。

空飛ぶじゅうたんの魔法は、じゅうたんに織り込まれた魔方陣に宿つてこる。こんなに穴だらけになつては、もう使えないかな。一応、明らかに途切れている場所などを補修して、駄目でもともととこりこりと乗つてみた。

「トーリヨイオキリヤ谷のマテラーラー婆さんへ

行き先を告げると、じゅうたんが波打ち、浮き上がつた。

お、いけるか？

しかし次の瞬間、急上昇したじゅうたんはめりめりと暴れ始めた。必死につかまつていい、危険な旋回を経て、ついにきりもみ状態で地面上に落ち始める。

うわー死ぬ！

ずどんと凄まじい衝撃があつたが、じゅうたんに包まれながら落ちたせいで大きな怪我はなかつたようだ。

まづまづの体で絡まつたじゅうたんから抜け出す。

やつぱり適当なことはするもんじゃない。

頭を振つてめまいを払い、顔を上げる。

すると皿の前には、壁全体に薦がびつしり絡んだマテラーラー婆さん

の家があった。

「なんだい、今の音はー。」

飛び出してきた婆さんが、いかにも姿を見るなり驚いて言つ。

「おや、早いね。つこせつと連絡をくれたばかりなのにもう来たのかい」

魔法糸電話で「今日行く」と連絡したのは、じゅうたんに乗る直前だつた。

婆さんは森を二つと山一つと湖を越えた先にあり、空を飛んでも半日がかりだ。

じゅうたん食いじゅうたんの補修の際に、飛行の魔方陣がびつとかなつて転移の術式に改変されてしまつたらしく。

転移を封じた魔法具なんて、聞いたこともない。偶然のものすごい奇跡ではあるけれど。

あのきつもみ落ト。

帰りもこれを使う気にはなれないなあ……。

最近、残業続きで体調を崩し気味らしく、特に肩こりがひどい。だんだん悪化して身体全体が重くなり、何もやる気になれなくなってきた。

「つかれたときは駅前の店がいいよ

同僚に勧められ、ある日の店に行ってみた。

ビルの十三階の奥に位置するその店は、明るくて間口も広く、入りやすい雰囲気だった。ステンドグラスを窓に配した西洋風の小さい内装で、ソファーレクソロジーかマッサージのサロンといったところか。

案内されて奥の個室に行くと、ゆったりとした白衣姿の男が出てきた。

彼は私を見るなり言った。

「ああ、ずいぶんつかれてますねえ」

「そりなんですよ。なんだかだるくて」

「でしおうねえ、じゃあそこ寝てください」

マッサージ師らしき男は、いつぶせになつた私の肩に軽く触れた。

そしてこきなり私の背中を平手でばしばじと叩き始めた…

「せひ、せつと樂になつなさい。」

「あこでててて」

力任せの容赦ない平手打ちで、かなり痛い。
拳でやるならともかく、こんなのとてもマッサージとは思えない。

「なにするんですか……こたた！」

「えいえいやあ！」

「ぎやあー！」

いたらの抗議を無視して私を打ちさえ続けた彼は、しばらくしてから突然叩くのをやめた。

「はい終わりました」

とんでもないへぼマッサージ師だ。

起き上がりつて文句を言おうとしたが、それよりも早く田の前に銀の十字架が差し出される。

「これをおひづぞ」

「なんですか、これ」

「お守りです。しばらく持ち歩いてください。一応靈は落としましだが、念のため」

白衣の男はこりやかに言った。

「たくさん憑いてましたよ。

疲れると抵抗力が弱つて、どうしても憑かれやすいんですね」

言われてみれば、さっきまでのだるさが嘘のようになくなつていい。

身体も軽い。

友人に報告すると、彼女はうなずいて言った。

「つまいでしょ？ あの除霊屋エクソシスト」

06・おつかれさま（後書き）

おつかれさまでした。

07. ハッシュタグ (機能)

「じゃあな、またね……」
「またねえ、ニキ君、またねえよー。」

07・ハンドレス・ラブ

「お願いです神様！ 彼を助けてください」

『対価は？』

「私の命を差し上げます」

『よからい』

「じゃあね……よしあさん……」

「神よ、お願いです。彼女を生き返りさせてください」

『対価は？』

「ぼくの命と引き換えに」

『よからい』

「まごせ……まごせ……」

「お願い！ 彼の、みじめの魂を呼び戻してください」

『対価は？』

「私の魂と交換で」

『よからい』

「さよなら……よしあさん……」

「お願いです！ 彼の、みじめの魂を呼び戻してください」

『対価は？』

「ぼくの魂を持つてこってくれ！」

『よかっふ』

『あつ!』……やみわく生きていってくれねばよ……

「よじおれと、よじおれとあつ」

『対価なつ』

『私が身代わつた!』……

『お前、こつまでやるんだよ……』
『いや、こつまで続けるのかなつて思つたわ……』

『あつ!』おおおおお!

『お、また来た……』

「よしあがきをやつ。」
『対価なつ』

『あつ!』
『対価なつ』

「 よしおわんを助けて」

『 対価は…』

「 ……私の命……こえ、私の来世の命でも換えられる…」

『 ほう、やつわたか。

ふむ……残念ながらこれわか呪うんな

「 そんな…」

『 そうだな、あとひとつ分は必要だ』

「 じゃあ、じゃあ、よしおわんの来世も……」

『 よかねい』

「 『 むんね、よしおわん。勝手な』」として

「 いいんだ、まち」。

神様が言つてたよ。来世がないから、今生が永久に続くな

「 えつ、それつて……」

「 ぼくたちは永遠に一緒に。まち」

「 ゆつおわん……」

07 · ハンドレス ライフ（後編）

『そんなんのありかよ』
『まあ、いいだろ？ 楽しませてもらったしな』

増え続ける宇宙のゴミ　スペースデブリ。

耐用年数を過ぎた人工衛星の残骸や、砕け散らばった部品たち。かつての開発の名残にして、いまや地球を覆い、人類の宇宙進出を妨げる邪魔者。

そのスペースデブリ対策の最後の切り札たる作戦が実行されることになった。

隕石落下魔法の詠唱装置を搭載した人工衛星を打ち上げ、地球周辺のデブリを意図的に衛星に墜とすのだ。

すべての準備は順調に進み、いよいよ魔法的宇宙塵掃討計画（Space Debris Magical Eraser Project）実行のときが来た。無人口ケットで打ち上げた魔道衛星SSC（Shooting Stars Collector）が無事に目的の軌道に投入されたのを確認したところで詠唱装置を起動。

やがてカメラに次々と墜落する金属片が映し出され始めた。

成功だ。

これで宇宙開発のリスクは大幅に減少する。科学と魔法の融合が、新たな道を拓いたのだ。

だが。

人々が計算違いに気付くまで、そとかからなかつた。

ありとあらゆるデブリが超高速で衛星に衝突するエネルギーは、想像を遥かに超えたのだ。

衝突エネルギーは一瞬で熱に変換される。

外部から絶え間なく供給される熱で魔道衛星は温まり。

ついには自体が火の玉と化した。

半永久的なループ機構を組み込まれた隕石落下魔法自動詠唱装置。メテオインパクト科学の粋を集めた耐熱装甲に加え、幾重にも施された自己修復魔法。

緻密な計算と先端技術に魔法を加えて実現した軌道維持プログラム。

SSCは灼熱をその身に宿しながら、休むことなく流星を蒐集し続ける。

地球はこの新たなる小太陽に炙られて、急速に温暖化ならぬ高熱化していった。

大気は熱風のハリケーンにかき回され、海は蒸発し、陸は熱砂に覆われる。

ほどなく地球は、生命を焼き尽くす死の惑星と化した。

環境の激変で、人々は宇宙開発どころか空すら望めぬ地下深くへと追いやられた。

すべての知恵と労力が、ただ生き延びために振り絞られた。

それでも多くの人々は死に絶え、さらに多くの動植物が絶滅した。

そしてついにデブリが尽きて衛星の表面が多少冷めた頃には。
かつての文明を維持するだけの力は、人類には残されていなかつ
た。

偉大なる科学のわざは喪われ、残つたのは、
おのが肉体に宿る力と、ほんの少しの奇跡。

すなわち剣と魔法。

純然たる力が支配する、
強き者たちの時代が始まつた……。

08・近未来ファンタジー的プロローグ（後書き）

いやまあ、SFはむちいえんすふあんたじーの略ですしね……？
始まつたけど続きはなし！

09・流星の降る夜は

今日はオニオン座流星群。

天文仲間たちと計画して、流星狩りに行こうとした。

もつとも活動が活発になる極大の時間は早朝とのことだが、オニオン座が昇る深夜ごろから流星は観測しやすくなる。郊外の開けた牧草地に陣取り、その時を待つた。

「あつ、流れた！」

ひとりの声を皮切りに、次々と鋭い光を放ちながら流れ星が墜ち始める。

さあ、ここからが勝負だ。

目の前に墜ちてきた光を、手にしたざるを掲げてさつと受け止めた。

見れば、目的の物体がごろごろとざるの中に転がっている。つややかな皮に包まれた大ぶりの見事な星タマネギだ。幸先がいい。

それから全員牧草地を走り回って、流星狩りに奔走した。流れ星を手に入れるには、とにかく地に墜ちる前にキャッチしなければならない。

どんな大流星でも、地に触れたが最後、あつといつ間にほどけて溶けてしまうのだ。

やがて深夜を過ぎて、薄明が始まる。

濃紺から藍色 そして白みゆく空に、流星は紛れていった。

みんなで集まつて結果を見ると、ひとり5個程度といったところか。多いとも言えないが、ますますだ。

中にはカボチャほどの大オニオンを捕まえた者もいる。

あまり知られていないのだが、流星群で手に入る宇宙の食材は、他にはないすばらしい味の広がりを持っている。

例えば今回のオニオン座流星群の星タマネギは、どうでも瑞々しいのに身は締まつて味も濃く甘い。これと1月3日(火)のルー座流星群で手に入るカレー粉で作るカレーなどは、一度食べたらもう一度と忘れられない美味なのだ。

これぞ天文ファンの醍醐味というわけだ。

戦利品を抱えてほくほくしながら、仲間と口々に話し合いつ。

「こないだのジャコテン流星群はどうだつた?」

「全然だめだつたよ。あれはばらつきがあるからなあ」

「あのじゃこ天、芋焼酎に激烈に合つんだけどなあ」

「俺は10年前のすし座流星群大出現が忘れられないよ。うまかつたなあ」

夜はすっかり明けて、昇る朝日に日を細めてそれぞれの帰路についた。

別れの合言葉は。

「じゃあ、次は11月なー」

そう、次は11月のすし座流星群。

その次のあなご座流星群は12月14日。

ふふつ ふふふふ。
楽しみだ……。

09・流星の降る夜は（後書き）

元ネタ流星群。日付はおよそのピークで、年にによって前後する」とあります。

- ・ジャコビニ流星群 10月8日
- ・オリオン座流星群 10月21日
- ・しし座流星群 11月17日
- ・ふたご座流星群 12月14日
- ・りゅう座流星群（しぶんぎ座流星群） 1月4日

流星群狩りの際は、あたたかくして風邪をひかないようこむ気をつけて！

ある日、家に一通の書留が届いた。

封筒には“商品券在中”と書かれている。
差出人は吉岡タケフミ。学生時代に所属していたサークルの後輩だ。

しかし、なんでこんなものを送つてよこしたのだろう。

一寸首をひねつたが、少しして思い当たつた。

そう言えば先日、彼が結婚したからお祝いの品を贈る、という友人の話に一口乗つたのだった。きっとそのお返しだろ。

封を開けると、もう一回り小さい凝つたデザインの封筒が出てきた。
ところがそこでまた首をひねることになった。

中身はいかにも金券らしい紙幣大の紙片だったが、金額や使用可能な場所がどこにも記載されていなかつたのだ。いくら表裏や封筒を改めても、文字とも模様ともつかない不思議な図柄が印刷されているだけだ。

よく判らないものの、その辺で使えそうにないことだけは確かだ。とは言え別にお返しが欲しかつたわけでもない。そのまま放つておいた。

すると数日後、当人からメールが来た。

『先日はお祝いをありがとうございました。

ところでお返しの件ですが、間違えて妻の親戚用のものを送つてしましました……。改めて送ります。それで申しわけありませんが、

できれば最初のやつは送り返してもうらえると助かります。住所は
県×××……『

ああ、なるほど。

どこか外国の商品券だったのか。

意外にそそつかしいところがあるなあ。

送り返すと、入れ違いにまた書留が届いた。

今度はきちんと地元のデパートで使える共通商品券が入っていた。

それからしばらくして、かつてのサークル仲間だった友人と飲む機会に恵まれた。

聞けば彼の結婚披露宴に出席したという。先日の商品券の一件とちよつとした好奇心もあって、お相手のことを尋ねてみた。

「ところでタケフミ君は外人さんと結婚したのかい？」

「ああ、＊＊＊＊＊さんね」

友人が口にした名前は、不思議なイントネーションをしていた。

「は？」

耳慣れない響きでよく聞き取れず、ナとコが含まれていることしか判らなかつた。

「ちよつと待つて」

とつさに聞き返すと、彼はとボールペンを取り出し、割り箸の袋

に何事が書き付け始めた。

けつこつな時間をかけて書き終えてから、箸袋を「ひりひり」とよこす。

「あの言語、面白そうだからちょっとかじってみたんだ。ほら

紙片にのたくる線からは、なんの意味も読み取れなかつた。

だが形にはどことなく見覚えがある。そう、例の“妻の親戚用の”商品券に記載されていた不思議な図柄に似ていた。さらに読みかたの見当もつかない文字列の下には、対応するローマ字だろうか、T - A c h i b - A n a - E r - I k o と記されていた。

「トアチヒイブアナエールイローさん。って言つても、こっちに帰化したとかで、タケフミ君には“ヒリロ”って呼ばれてたけどな」「ふうん。アジア系とか？」

「いやいや。おとなりの世界から来たすごい美人さ」

友人はこいつらの問いを待ち構えていたよつこにやりと笑つて応えた。

「真つ青な髪と見るたびに色が変わる虹色の瞳が印象的でね。奥さん側の親戚もたくさん来てたし、華やかなパーティーだつたな」

「くええ」

すじいな、

と口の中でつぶやいたあとで、気付いた。

といつことは、最初のあれは。

おとなりの世界の商品券？

.....。

ま、その辺で使えそうにない点では一緒に。

そして我々はタケフミ＆エリコ夫妻の恋の成就を寿ぎ、その洋々たる前途を祝つて改めて乾杯した。

ハッピーウェディング！

ふたりの未来に幸あらんことを。

10・11 祝儀返し（後書き）

タケフミ君とヒリコ嬢の異世界間ロマンスは次回にて！（つづ）

あるじめじめした暑い日の夜、眠れずじるじるしていたら呼び鈴が鳴つた。

こんな時間に誰だらけ。

玄関に行くと、カギも開けていないのに家の中に宇宙人が立っていた。

大きなステッケースを持つているところを見ると、宇宙より宇宙か……。

宇宙の各星を巡つてものを売り歩く行商だ。やつらはプライベートや時間の概念が人と違うので、けつこうこういう非常識な不法侵入をやらかす。

「間に合つてます」

「まあまあ。どんな商品でも扱つておりますので、話だけでも聞いてください」

最初は断つたが、しつこく食い下がつて帰らつてしまい。仕方なく聞いてみた。

「じゃあ、この湿気なんとかならない?」「ええ、ええ、もちろんござりますとも。一いちばんぞいかがでしょうか」

すると宇宙人は待つてましたとばかりに、一本のガラス瓶を取り出した。

早つ。

「……なにこれ」

「湿気を吸い込む瓶でござります。地球風に申し上げますと、高機能除湿機といったところでしょうか。キャップを回すだけでOKなので、初めてのかたでも簡単にご使用いただけますよー。」

宇宙人は熱意を込めて白邊子に言った。

「しかも効果は無限なので、交換の必要もございません。

当社が開発した画期的技術でして、内蔵の湿気専用マイクロプロセスホールが周囲の水分を一気に吸収するのですー！」

「……一気にひたぢれくらー？」

「もう、1%だって見逃しません。半径2キロメートル内は、大気中の水分はおろか無機物からも有機物からも、最後の一滴まで搾り取れます。

恐らく地球の科学水準では、ここまでの商品ございませんかと

「ございませんし、こつません」

死ぬじやん。

丁重にお断りしたにも関わらず、よひす黙はれて下がらない。

「試しに使ってみてくださいよ。絶対この商品の素晴らしさに惚れ込むこと請け合いでありますー。」

「けつひです」

「わうおっしゃりゅーーーでは私がここで実演してみましょーか?」

このキャップを右に3回、カチッと鳴つたら左に2回

「ひいかがい、せいかい」

「**○**自分で使われますか？」
では、こちらは説明書で、**○**に図解し

「君の瞳」

さんざん一方的に説明したあげく、けつときよく宇宙よりすすは湿润専用ブラックホール入りガラス瓶（干物／砂漠無差別製造機）を置いてしまつた。

じ、いやなんだよ、これ……。

12・絶対稀少フレミアム

「おめでとうございます！ 当選です！」

「うわー」

ある休みの朝、宇宙ようず屋が突然部屋に飛び込んで来た。幸福な朝寝をむさぼっていたところに大声で叫ばれて、びっくりして飛び起きる。

宇宙ようず屋は、宇宙人の訪問販売セールスマンだ。宇宙人だけに世間一般の常識から斜め方向に外れた、強引といふか迷惑な営業を仕掛けてくる。

しかしいくらなんでも、もう少し現地の生活様式に敬意を払うべきではないか。

いや、だからこいつの持つてくるものは売れないのか……。

そんなことを寝起きの頭でぼんやりと考える一いつの様子にはまったく構わず、彼は一通の封筒を差し出してきた。

「我が宇宙ようず屋商会の創業記念キャンペーントークンですよ！ 先日お買い上げいただいた高機能除湿機からのご応募で、見事一二等に当選されたのです」

「…………は？」

寝ぼけまなこで封筒を見るが、白無地の表面には何も記されていなかつた。

だがぼうっとしたまま眺めていると、やがてあぶり出しのように日本語で『視線認証完了！一致率97・2%！未加盟辺境銀河太陽

系第3惑星地球日本国』と浮かびあがつた。その文字が崩れ、続いて凝つた字体の『十七弦箏座楽団コンサートペア無料招待券』という文字に置き換わる。

『宇宙よりす屋は封筒をぐいぐいとこすりに押しつけながら、口から緑色の泡を飛ばして興奮した調子でまくしたてた。

「一等ですが、十七弦箏座楽団の演奏会は大変に人気がありて、滅多に手に入らないプラチナチケットなんですよ。一等の逆巻ガガミ貝星団高級リゾートバカンス一週間の旅より絶対おすすめです。」

「でもあの除湿機は別に買ったわけじゃなくて、あんたが勝手に…」

…

「とにかく！」

『当選おめでとひびやれこめす。お受け取りください』

『宇宙よりす屋はこすりの言葉を遮りて封筒を強引に握らせ、それを帰つてしまつた。

さつと営業成績をこまかすために、自分で金をたてかえて売り上げに計上してしまつてゐるのだろう。

封筒を開けて中のチケットを取り出して見てみると、開演は宇宙ギレゴール暦F.Q. - T.5逆立月3.5日9.6時30分、場所はアプサラ銀河ガンドルファ星系第25惑星キンナル星サラスヴァット王國のラクシュマハ王立歌劇場となつてゐる。

なるほど。

宇宙ギレゴール暦F.Q. - T.5逆立月3.5日9.6時30分開演で、

アプサラ銀河ガンドルファ星系第25惑星キンナル星サラスヴァ
アット王国のラクシュマハ王立歌劇場ね。

……つて、

いっだ。
どこだ。

そしてどうせいつに行けとこつのだ……。

今日は毎月購読しているタウン情報誌の発売日だ。

仕事帰りに書店に寄り、目的の地元雑誌のコーナーに直行した。

平積みされた本の山からとりあえず手に取ったが、立ち読みされて少し表紙がよれている。なんとなく気分が悪いので数冊下から別の一冊を抜き取ろうとしたとき、ふと隣に見慣れないタウン誌があるので気がついた。

最近、タウン誌も創刊ラッシュだからなあ。

その雑誌の巻頭記事は『水杜市路地裏グルメ総力特集』。ぱらぱら見ると、けつこう色んな店が出ている。かわいいペットの写真なども載つており、価格も370円とお手頃だ。面白そうなので買ってみることにした。

ところが家に帰つてじっくり読み始めて、首を傾げることになった。

店の情報が出ていることは出ているのだが、何かおかしい。

例えば地元で有名な洋食レストランの紹介。

『この季節はスズキのポワレが人気メニューで新鮮なあらも豊富だが、超人気スポットのため閉店後45分が勝負。ただし、ランチがオニオングラタンスープセットの日は避けたほうが無難。どうしてもという場合は、右端のボックスに注意されたし』

某人気ラーメン店の記事。

『毎晩閉店後に供される魚だしと動物系のWスープはやみつきになる血さだが、若干の旨味調味料および添加物使用。飲みすぎに注意。だしガラは平日の早朝5時に表通りの集積所に直接出される。収集車が6時には現れるため、確実を期すためには出待ちを』

激しく違和感を覚えつつも、とりあえず謎が解けないまましばらぐ特集以外の記事も読み進めていった。

『今月のネズミの巣』

『中央通り魚屋＆寿司店マップ』

『またたびを百倍楽しむ方法』

等々。

やがて、突然はっと閃いた。

これって 。

猫のタウン誌？

だとすれば、納得できる。

グルメ記事はオススメ残飯スポット、ペットの「写真だと思つたのは街角の美人野良猫スナップだったのだ。

それにしたつて、どうしても気になる。自分の想像が正しいのか確かめたくて、翌日もう一度書店に行ってみた。

だが十冊程度はあつたはずのその雑誌は、一冊も残つていなかつた。

「そんな本ありましたか？ おかしいなあ

店員に訊いてもあいまいな応えしか戻つてこない。

狐（猫？）につままれたような気分で帰ろうとしたとき、タウン

誌の棚の前にいる小柄な女の子に目が止まつた。棚を幾度も見返しては、ため息をついている。

ん？

もしかして……。

「すいません」

声をかけると、女の子はびくつと肩を震わせてこちらを振り向いた。

色白でかわいい顔立ちをした女の子だ。頭のてっぺんで左右二つのお団子にまとめた髪が獸耳けもみみを思わせる。大きく見開かれた瞳は薄緑がかつた綺麗な色で、なんとなく見覚えがあつた。

多分、街角スナップのコーナーに出ていた、スレンダーな白い雌猫だ。

用心深く後退のりぞのつとめる女の子に、急いで持っていた例のタウン誌を差し出す。

「あの、これ、もう読んだから。よかつたらあげます」

「……」

彼女はしづかにへりひりとタウン誌を見比べた。

少しして、本をさつと取つて身を翻す。

軽い身のこなしで自動ドアをするとすり抜けて、街の雑踏へと消えていった。

370円のふしぎ体験。

仕事帰りにバーで一杯やつて、隣にいた男と意気投合した。

彼はくたびれた中年男だったが、酒がまわつてると、とつておきの秘密を教えるように言った。

「実は私は世の中をなんでも思い通りにできるんだ。世界中の川をオレンジジュースにしたり、人類すべてをハゲにしたりせ」

「へえ。そいつは凄い」

「ちらも酔つて、信じてはいけない。相槌も適當だ。そもそも、酔つ払いのほら話は壮大なものなのだ！」

「じゃあ世界征服だつてできるわけだ！ どうしてやらないんだ？」

「私なりの道徳と倫理つてわけさ。お優しいだろ？」

「おうおうおう。これからも清く正しく世界を見守つてくれたまえ！」

それからも延々と飲み続け、ついに明け方に店を放り出された。二人でようよると早朝の薄汚い繁華街を歩いていると、彼が尋ねてきた。

「あんた、今日は仕事か……？」

「十時から……会議だけど……つ、無理かな……」

「私もなんだよ……」

彼はつぶやくよつてから、立ち止まって電柱にもたれた。

「じゃあ、今日は特別……」

彼の力ないつぶやきと同時に、白んでいた街が急速に暗くなつて
いつた。

見上げると藍色を取り戻した空をふちどるよつこ、消えていたネ
オンがぼつぼつと点灯し始めた。あつという間にその数を増やして
いき、派手な化粧で汚濁に満ちた街の素顔を覆い隠していく。
まるでピテオを巻き戻し再生しているようだつた。

やがてくたびれた朝の街は、夜の猥雑な賑わいを取り戻した。

「これで日付が変わる前に帰れるだらつ……。楽しかったよ、じゃ
あな」

彼はそつと片手をあげ、電柱から離れてふらふらと人混みの
中に消えていった。

夢でも見たかな……。

15・魔術師の饗宴（前書き）

11月なのにやしたる意味もなくお盆の設定でまつたくもつて申し訳ございません。

お盆休みで帰省したら、買物先で久々に中学時代の同級生に会つた。暑いのでどこか涼みながらとことことになり、近くの「アリーナ」に入つて近況を語り合つた。

「ちからは懐かしくていろいろ話しかけたが、じばらくして気が付いた。

どうも彼の表情が冴えない。

「実は妹が白魔術師検定に合格してね」

「へえ、すごいじゃないか」

彼の家族は全員が魔法を使う。町内でも有名な魔術師一家なのだ。

「そう言えばお前は？」

「うん……去年、心理魔術師資格を取つたよ」

「そのわりに元気がないな」

「ああ。つちつておふくろが黒魔術師で、親父が幻術師で、婆さんが妖術師で、爺さんが鎧魔術師だろ？　全体的に白魔法とはどうしても折り合いが悪くてな。おまけに魔女は死んでも成仏に時間がかかるからで。ひい婆さんやひいひい婆さんの靈もまだいて、もうめちゃくちゃだよ」

「白黒あたりはまだともかく、鎧魔術つて……。
いや、いいけど。

「そつか、大変だな」

魔術間の折り合いがどうこうなど、はつきり言ってあまり深く関わりたい世界ではない。とりあえず無難な相槌を打つておくことにした。

だが相手は心理魔術師だ。

当然というか、あっさり見破られてしまった。

「お前、判つてないだろ」

彼はアイスコーヒーのグラスを横に押しやり、真顔で言った。

「いいか、魔術というものはだな。迂闊に違う系統の術が混じるとすごく危険なんだ。だいたい心理魔術と黒魔法と錆の術を混ぜたりしたら、何が起るか考えたことがあるか……」

それから家族連れで賑わう屋下がりのファミレスで、彼は魔道の秘儀について延々と語り続けた。

一時間近くも禁断の外法やら精神の闇やらの話を聞かされて、こつちはすっかり具合が悪くなってしまった。町内にスズメバチとタンポポが少ない理由などは、恐ろしくて思い出す氣にもなれない。

今晩は確実に悪夢にうなされることだろう。

別れ際、彼は言った。

「まあ一度遊びに来いよ。ひい婆さんは生前は腕のいいイタコだから、今もときたま仕事が来るんだ。幽霊が降霊術やる光景なんて、ほかじゃ見られないぜ！」

やだよ、そんなの。

15・魔術師の饗宴（後書き）

心理魔術と黒魔法と鑄の術を混ぜたら何が起るかしばらく考えて
みましたが、ちっとも判りませんでした。町内にスズメバチとタン
ポポが少ない理由は想像にお任せします。……（ ； 。 ）

幻の銘酒『真・鬼壊し』を手に入れた。せっかくだからみんなで飲もうということで、友人たちを集めて酒盛りを開くことにした。

だがやつて来た呑み仲間十人のうちの三人は、いくら勧めても飲もうとしない。

「俺、鬼壊しはやばいんだよ。かわりにこれ持ってきたから、みんなも味見してくれ」

うち一人がそう言って、一升瓶を取り出した。なんと、これまた超入手困難な『神殺・極』だ。出回る数量が少ない上、プレミアがついて天井知らずな価格で取引されるとうわさの激レア銘柄だ。すると今度は別の二人が困った表情になった。

「僕は鬼でいいよ。そつちはちょっとね……」

と、『神殺・極』には手をつけない。

奇妙に気まずい空気が流れ始める中、さらに別の一人が言った。

「俺も『魔王退散』は駄目なんだ。滅多に出回らないから助かるけどさ」

するとさらにもう一人がと告白した。

「私は『仮殺し』だな。好奇心でちょっと舐めたら本当にひどかつたよ……」

全員が顔を見合わせて、乾いた笑いを漏らした。

やがて気の利く誰かが話題を変え、別の安酒と肴を並べて大宴会に突入した。明け方に解散したが、みんな等しく一日酔いになつたに違いない。

しかし十一人集まつて、鬼三人、神一人、魔王と仏が一人ずつか
……。
人間つて意外に少なかつたんだなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6322w/>

単品集うそ風味

2011年11月23日18時03分発行